

名誉会員からのメッセージ

戦後昭和時代の鉄鋼協会

Activity of the Iron and Steel Institute of Japan(1946~1989)

日本鉄鋼協会 社友 木下 亨



私は、平成26年7月で90歳となりました。日本鉄鋼協会創立100年を迎え、協会関連の思い出を書くことになりました。昭和22年9月東大二工冶金学科を卒業、直ちに商工省に入りました。入省して鉄鋼統計を経て鉄鋼行政の課の田畑新太郎先輩に仕えました。最初の仕事は、鉄鋼協会元会長吉川 晴十先生のお宅を尋ね書籍を整理することでした。これが鉄鋼協会との縁の初めだったと思います。さて、戦後の協会活動について思い出を書くしてみます。まず協会事務局は丸の内仲14号館2階の1室にあり、三宅 運秀氏が一人暮らし、主事として吉崎 鴻造（東洋鋼飯）氏が面倒をみて頂いたと記憶しています。

戦後の鉄鋼業を復興させるため、商工省に委嘱され昭和23年には高炉調査団と平炉調査団が全国に派遣されました。昭和24年には平炉酸素製鋼共同実験が尼崎製鋼で行われ、酸素を活用するものとなりました。この頃は米国技師により日本鉄鋼技術の水準は、米国に比べ10年乃至20年の遅れがあると指摘されていました。

昭和24年商工省が鉄鋼熱経済強化対策要綱を策定し、産学官の鉄鋼技術研究連絡会（後述）の下に熱経済技術部会を設置しました。部会長は山岡 武（日鉄）氏が当たり、熱計器（東大 山内 二郎先生）、加熱炉（日鉄 湯川 正夫氏）、熱精算（東大 田中 清治先生）の3専門委員会を設け調査研究を進めるとともに昭和26年にわたって部会総会を数回開催しています。また鉄鋼各社に高炉・コークス炉、平炉・圧延の操業実績を詳しく記した作業月報の提出をお願いしていました。昭和25年には全国27主要鉄鋼工場に熱経済技術調査団が派遣されました。

昭和25年山岡 武会長のGHQと日本政府への要請により米国への調査団を派遣することができました。スチールミッションと称され、団長は小平 勇（日鉄）、団員には和田 亀吉（日鉄）、富山 英太郎（鋼管）、外島 健吉（神鋼）、小田助男（新扶桑後に住金）、植山 義久（川重）各氏など12名でした。米国の実情を知り日本鉄鋼業の今後の在り方に極めて

有意義であったと思います。この直後に西山弥太郎氏が川重から川崎製鉄を発足させ千葉製鉄所の新設構想を発表されたと思います。まさに昭和26年からの鉄鋼業第1次合理化計画の幕開けでした。

特筆すべきことは共同研究会の設立と運営です。昭和23年鉄鋼協会、鉄鋼連盟（当時は日本鉄鋼会）、商工省の3者により共同研究調査体制のもととなる鉄鋼技術研究連絡会が組織され、8部会が発足しました。昭和25年には米国のデミング博士の来日により統計的品質管理技術が紹介され、26年鉄鋼品質管理部会が発足しました。研究部会の開催回数、出席人員、提出資料の増加と共に経費もかさんだので、3者は予め予算処置を講ずることが必要となり、昭和29年3者によって改めて鉄鋼技術共同研究会を組織したのです。発足時の研究部会は製鉄、製鋼、鋼材、特殊鋼、熱経済技術、品質管理、調査の7部会でした。部会メンバーは、業界技術者が大多数でした。事務は協会、鉄連、通産省が部会ごとに分担運営しました。部会は委員各位が自工場の歩留り原単位など操業実績を出し合って議論したり、工場現場を交互に視察するなど極めて活発に行われました。当時の委員は全体で760名、会議の開催回数は年60回程度だったと思います。また昭和32年には鉄鋼技術管理専門視察団（団長 蜂谷 茂雄氏以下8名）が米国へ派遣され、私も団員の1人になりました。

この共同研究会は、昭和38年から日本鉄鋼協会共同研究会の名称となり、事務局も鉄鋼協会一本となって名実ともに協会事業となりました。当時の研究部会は12でした。

鉄鋼協会事務局については、昭和37年山岡 武、浅田 長平（神鋼）両氏が相談、鉄鋼技術の向上には協会活動を盛んにするため組織を整えることが必要であり、専務理事制度を設けることとし、田畑 新太郎氏を迎え入れました。当時の職員は、12~13名位だったと思います。なお当時の鉄鋼生産規模は3千万トン程度でした。

そして会誌や刊行物、学会の充実はもとより、各種セミナー、国際会議、ドイツ・中国・ソ連等との二国間シンポジウムの

開催、研究費の助成、鉄鋼のJIS原案の作成等協会事業が拡大充実されました。昭和53年には、鉄鋼技術情報センター（三井 太祐氏）、54年には国際標準ISOのTC17（鋼）事務局を設けました。なお、昭和38年より大手鉄鋼会社から2年位の任期で数名技術部員を派遣していただいております。昭和末年の事務局は総務、技術、業務の3部と鉄鋼技術情報センター、ISO事務局となっており、職員数は60名位で、事業規模は一般会計8.4億円その他総額9.7億円でした。事務所は会員同士の情報交換の場ともなっていました。事務所は、ぬり彦ビル（中央区京橋）、交通公社ビル（丸の内）を経て昭和42年から経団連ビル（大手町）3階になりました。

私は、昭和56年から平成2年まで専務理事に選任され、武田 喜三氏、松下 幸雄先生、石原 重利氏、久松 敬弘先生、八木 靖浩氏の5代会長に仕えましたが、その頃の鉄鋼

生産は1億トン規模で推移していました。昭和60年には創立70周年の記念行事として物故会員追悼式を行い、また歴代会長の墓所を理事で手分けして探しだしお墓参りしたこと、その際初代会長野呂 景義氏の墓前の門扉（協会寄贈、鉄铸件）がかなり傷んでいたのを、草川 隆次（早大）先生に頼んで復旧したこと、2月6日を創立記念日としたこと、学生の鉄鋼工場見学会を開始したこと、事務所内募集でロゴマーク（ISIJ）を決定したことを思い出します。

また八木 靖浩会長（昭63～平元）の時代、鉄鋼研究振興資金（10億円集めて10年間で使う）を募金しましたが半分しかできなくて残念であったこと、平成元年には外島 健吉氏から私財1億円の寄付を頂いたこと等々頭から離れません。

（2014年6月4日受付）



昭和58年4月8日、伊木常世、吉崎鴻造、入一、森永孝三、俵隆治の諸氏と木下亨が集まり協会事業の拡大強化の頃を振り返って語り合った。
（鉄鋼協会70周年誌より）